

# 遊戯の自由性に就て

目白幼稚園 和田 實

遊戯が興味本位のものであり、娯樂的氣分の濃厚なものであることは、誰も、否むものがない。従つて、遊戯は之を強要することが出来ない。若し、之を強要すれば、娯樂的氣分は、順に、消失して、苦痛、努力の状態となり、遊戯としての性質は一朝にして、作業の状態となることは、皆、人の承知するところのものである。

然るに、實際に、保育の状態を見て居るに、保育者の技術の未熟からして、折角、樂しかる可き遊戯を、何等の興味なき苦業の状態に置いて、然も、之を強制して居る場合は随分多い。傍に之を見て居るに、如何にも子供に氣の毒でもあり、又、保育上殘念でもあり、父兄に對しては相濟まぬ様にも思へる。人の子を損ふのではないか、慄然たることも屢々であるが、子供は存外、平氣なもので、あくびをしたり、傍見をしたり、隣の子供に、いたづらしかけたりして居る中に忽ち十五分や二十分を過して、自由遊びとなり、嬉々として、飛びはねて居る。惟ふに、斯る状態の保育を行つて居る所は隨所にある様である。殊に、宗教的色彩の濃厚な幼稚園なきでは、一層、斯る状態が多い様である。嘗て、記者の參觀した某宗教的保育をして居る幼稚園では、一日の大部分を斯る一齊保育に充てはめて、自由遊びの時間は極めて尠く、幼兒は強制的に活動欲を殺され、興味欲を斷念せしめられて唯々諾々先生の指圖に従つて、或は運動し、或は手技して居るのを見た。然も、夫れが、世界に於て最も、自由を尊ぶアメリカ人に因つて、支配さるゝ幼稚園であること云ふことに於て、喫驚を禁じ得ざるものがある。吾人は之を今より三十年前に見て、是が、打破の必要を感じ、或は、會集の不必要を

唱へ、或は嚴格なる宗教的儀式的幼兒教育に不適當なるを唱へて來た。幸にして、此主義は一般に採用せられて、今日に於ては遊戯の自由は普く保育界に共通したる觀念となつた。觀念はなつたが、實際に於ては、決して、徹底したる實行を伴つては居らぬ様である。殊に、都市に於ける學級式室内保育に於て、此弊、最も、多い様である。

吾人の主とする自由遊戯保育の主張は、彼宗教式強制保育、即ち學級式室内一齊保育の様式は極端なる保育の兩方面を以て面白い對照を云はねばなるまい。一方は遊戯の自由性を極端に認めるのに對し、一方は、全然、子供の自由を無視し、徹頭徹尾、命令を以て作業的に運んで行かうとして居る。

以上二つの主義の對立は、當分の間は、何れも、結著の出來ない問題として、残るのではないかと思はれるが、吾人は何處迄も、事、幼兒教育に關する限り、遊戯自由の主張を捨てることは出來ないを信する。尤も、學齡を六歳とするか、又は七歳とするかに因つて、幼兒教育の年限が一年早く終るか、一年長くなるか云ふ所で多少の差違が出て來ることはあるが、兎も角、幼兒教育云はるゝ以上、遊戯自由の原則は動かしてはならぬ云ふことは吾人の年來の主張である。

所が、老婆心の強い人は、何うも、此遊戯自由主義が、危險性を含む様に考へられて仕方ないが見える。そこで、屢々吾人に向つて問ふ。曰く、遊戯の自由云ふことは、誠に、美はしい理想であり、實行も困難は思へぬが、扱て、實際に當つて、之を實行して見るに、保育者の思ふ様に、子供の着いて來ない場合がある。一つの誘導目的を立て、大に、之を以て、全幼兒の興味をそゝつてやらうとしても、之に副ふて來ない子供がある。多くの子供が、興味に興奮して、夢中になつて、活躍して居るのに、平然としてぼんやりして居る。試みに、之を放任して置いて見るに、何時迄たつても、依然として仲間入をしない。是は何う云ふものであらうか。云つて心配する人がある。併し、斯う云う頑固な消極性なものは滅多にあるものではない。吾人の經驗するところでは、永くも、半年間、多くの場合に於て、一學期もするに、一

般の幼児に一所に結構遊ぶ様になるものである。然れば、千人に一人や二人の頑固な消極性のものがあるからきて、之を以て、遊戯の自由性を捨て、しまふには當るまい。返事をしない子供、嫌ひな遊戯を一向しない子供、圖畫を嫌ふ子供、唱歌を唱はぬ子供、お話を聞かぬ子供等々、十人十色で、色々な傾きを持つた子供が中々多い。殊に、家庭教育が、少し特色を持つた家の子供には、或長所を持つと共に、又、他方に相當の缺陷を表はして居り、従つて、之を矯正して一般的な圓滿な子供にするのには、可なりな誘導的努力を要するものであるが、是等個人的差異が如何に多からうとも、是が、保育の自由性を危険がる理由はななり得ない。否、寧ろ、幼児の斯る個性的差異が、却つて、保育をして強制的に行ふことの危険を暗示して居るものを見ねばなるまいと思ふ。故に今日、子供に與ふる所のもが、或四五の子供には興味多く受取られなかつたからきて、何も、心配するにも當るまい。今日見せ付けて置いたが爲めに、明日は存外興味を起して來るかも知れない。空しき様に見える努力が、一週間の後、一ヶ月の後に、何んな好結果を齎すか知れたものではない。今日與へる所のものを、今日直に食べて呉れば、満足出來ぬ云ふのは誘導の氣持ではなくて、是は學校教授の態度である云ふはねばならぬ。幼児教育は、決して、學校に於ける嚴格な教授の態度を採つてはならぬ。

所が、市内人家稠密な場所に於て、狭まい室内に多くの幼児を收容して居る幼稚園では、主義としては遊戯の自由を認めるものゝ、遊戯の種類を案配する上には、矢張り、一齊的に、教授的に時間割を定めて働き掛けることを便利とする場合が多い。従つて、未熟な保育者の活動は動もすれば、興味本位の遊戯の域を脱して、純然たる教授的作業の形質を供ふる様になつて、主義としては遊戯自由の主義を奉じて居ながら、實際には、彼の宗敎式、嚴格主義の保育に墮して行つて居る場合が多い。是は頗る遺憾なこゝであるが、扱て、之を如何にして救ふこゝが出来やうか。今日保育上に於ける吾人の悩みは此處にある。

此悩みを救ふ唯一の方法は、保育者が其材料を選択するに當つて、充分興味ある材料を選ぶことである。時には娯樂氣分の濃厚なものを選ぶことも必要であらう。兎に角、幼児が満身の努力を傾けずには居られぬこと云ふ様な興味多きものを選ぶことが必要である。幼児の興味が充分に發揚する程のものならば、保育者の取扱方が多少、作業めくところがあつたにしろ、幼児には氣附かれもせず、嫌氣を起させる心配もなく、仕事は運んで行くものである。幼児の興味ある緊張の中に仕事が終わらへすれば、そして、適當な休息と弛緩とが與へられさへすれば、保育は損害なく、進行するに相違ない。此處の要領さへ失ふことなくば、仕事は必ずしも、自由遊戯の形を探らぬことも、差支はない。故に、要點は結局材料の選擇如何に云ふことに歸着する。如何に、形式は理想的であつても、材料の選擇が適當でなければ仲間に入らぬ子供が多くなつて、つまりは何にもならぬ事になつて仕舞ふ。

併し、室内一齊遊戯の形式を採る場合に、大に警戒せねばならぬことがある。それは、常に、幼児の心的經過に注意して、興味的努力の程度を觀察し、之に善處することである。主義としては遊戯自由の主義を奉じて居ながら、壓制的な作業者主義に墮するに云ふことは、主として、此幼児の心的經過を無視して、保育者の獨斷のみに、授業を進めるからこそ、起り來る弊害であるから、保育者が注意して、幼児の興味如何を觀察し、興味の盡きたる時に、潔きよく、仕事を繰り上げることにすれば差支ない譯である。蓋し、此邊の呼吸は多年の經驗に俟つより外はない。何事にしても、注意深き經驗は眞理を教へて行く。形式でのみ議論は出來ないものである。